



突然亡くなった人

「落ち着いた別れの時」と「素直に話せる場と人」

連載の最終回は、突然逝ってしまった人の、人生終わりの日々のケアです。

永井裕之さん。看護教員だった妻が入院。手術が成功して「あ～、これで楽になるわ。明日はあれとこれを持ってきてね」と話していた翌日、頼まれたものを持って病院に行ったら、妻の病室にベッドがありませんでした。あれ？

別の部屋に案内され、「点滴の後、急変しました。少しお待ちください」という説明だけでナースは行ってしまいました。気が気でない状態で待つ長い5分の後に、当直医が来て「今は脳死状態です。蘇生処置を続けています。親族に連絡してください」との説明。まだ妻には会えません。さらにものすごく長い15分の後、「処置室に来てください」。

処置室には、医師とナースが疲れきった様子で呆然と立っていました。一緒に行った妻の妹もナースで、処置台の姉はもう亡くなっていると直感し、「無駄なことはやめてください」と一言。「よろしいですね」と医師。永井さんは、突然の妻の死を、妻の妹、医師、ナースら6人で見届けたのでした。

最後に触れた妻はもう氷のように冷たく、顔も体もむくんで膨らみ「極めて異常な姿だった。何が起きたのか、なんでこんなことになったのか……」。主治医の「心筋梗塞でした。助けることができず、申し訳ない」という言葉に、永井さんは「死因を知りたい、解剖をお願いします」と伝えたのです。

結局永井さんには、妻と2人での別れの時はありませんでした。

その後、さまざまな経緯があり、解剖が行われ、死因究明の中で、医療ミスも明らかになりました。

1年8か月後、当事者のナースが訪ねてきて、涙ながらに「もっと早くお話ししに来たかった」と謝

罪し、妻の人生最後の様子を話してくれたとき初めて、永井さんは許す気持ちになったそうです。

「20年経って、今残っているのは、自責の念です」と永井さんは言います。前日の夕方も会いに行けばよかった。手術日を祝前日にしなければ術後のスタッフ体制が整っていたかも、と。

以来、永井さんは医療事故防止の活動に力を注いでいます。各地の病院などで医療安全研修の講演に

招かれると「突然の死に遭遇した遺族は、一番お世話になった医療者に会わせてもらって、どんな様子だったかを話を聞かせてもらいたいのです」と伝えていきます。つらい思いでいる遺族と医療者が話し合えるように。

医療安全への国を挙げての努力の結果、診療報酬で「医療安

全対策加算」等が付き、「日本医療安全調査機構」ができ、WHOは2019年に9月17日を「世界患者安全の日」と決めました。

*

この連載では2年間さまざまな別れの日々を取り上げてきました。0歳から90代まで、病院やホスピスやグループホームや家庭で、健やかな死や急死や事故死……。どんな人生終わりの日々にも必須なことは、次の2つに尽きるように思います。

- ・落ちついた別れの時。会って触れて話しかけて。
- ・自分の感じていることを素直に話せる場と人。きれいな気持ちも穏やかならざる思いも含めて。

医療事故による急な別れは、患者・家族・医療者の心に大きな傷が残りがちです。だからこそ、この2つを必ず持てるような看護をと、願わずにはいられません。

むらかみきみこ◎ターミナルケア・医療安全・在宅ケアのテーマで、国内各地、海外10か国を継続取材。主な著書に『患者の目線—医療関係者が患者・家族になってわかったこと』(医学書院)、『納得の老後—日欧在宅ケア探訪』(岩波新書)。



永井さんと妻。浜離宮庭園にて(1998.10)